慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昭和廿九年秋期見學旅行記
Sub Title	
Author	高橋, 正彦(Takahashi, Masahiko) 今, 無畏子(Kon, Muiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1955
Jtitle	史学 Vol.28, No.2 (1955. 9) ,p.138(270)- 144(276)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19550900-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は一九二二年、三十八歳のときであつて、次いで二四年にはアジアの目ざめ Le Réveil de l'Asie, l'impérialisme britanique et révolte des peuples が出た。このグルッセ氏最初の二書については我が史學三ノ四（一九二四年九月）に當時、巴里に在つた松本信廣教授が逸早く紹介してをられる。この二書が後年の大家、グルッセ氏の出世作となつたのであるから、これは實に我が學界への最初の紹介である。その後、次々と述作を出して行き、最近に著されたのが本書である。なおこの間の大著のひとつたる草原帝國（L'Empire des Steppes）も塾出身の後藤十三男氏によつてはやく譯出された。誠にグルッセ氏と塾との因緣淺からざるものありと言うべきである。

本書は例のクセジュ文庫の一冊として出されたもので、グルッセ氏の數多の大著に比すれば最も短かい書物に過ぎないが、それだけ多年の成果を壓縮して最後に到達したエッセンスと見られるものであり、グルッセ氏の學風もよく窺うことが出來る。本書はその題名の示す如く、文字通りのアジア洲に關する歷史であつて、上は北京人から下は毛澤東まで、東は日本から西はシリヤ・アナトリヤまでを包含している。これだけ厖大な時間と空間とを僅々百餘頁に盛り込まれたその手際の良さは驚歎の外はない。恐らくグルッセ氏を除いて、餘人のなし得ぬ所とすべきであろう。本書の特色は複雜なアジア各地の政治史を極めて簡明にまとめ、これに氏の得意とする美術史を適當に織り込まれたことにあると思う。特に我が學界の比較的遲れている西アジア史に相當の頁數が割かれてをるが、この意味に於いて譯者は正にその人を得た感がある。グルッセ氏の秀れた文章は前島博士の麗筆によつて、頗る忠實に譯出せられている。好適の東洋史入門書として廣く讀まれることを希望するものである。

（和田博德）

彙　報

昭和廿九年秋期見學旅行記

昭和廿九年度史學科見學旅行は、伊木先生及淺子教授御指導のもと竹田助教授、河北助教授の參加もあり、十月三日より七日に亙つて行われた。學生の參加は大學院三名を含めて五〇名であつた。一昨年の東北、昨年の關西と順次西へ向い、今年度は山陰地方、主として出雲大社附近に目的地を選んだ。史學科先輩の島根縣知事恒松安夫氏の御援助により當初予定した以上の成果を得たことは喜びにたえない。

十月三日夜東京發、翌四日夕五時四八分、玉造溫泉驛着、たゞちに宿舍に入る。

第一日目（十月五日火）晴、朝食前に附近にある玉造神社を訪

れ、宮司の説明により古代の琢玉用砥石を始め、曲玉、平玉等の遺品を拜見した。九時宿舍を出で、大社に向う、十一時すぎ到着、千家尊宣氏の御好意にて一同茶菓の接待にあずかり、千家氏より出雲大社の沿革、並びに出雲地方の果した歴史的意義につきお話しがあつた。晝食の後、案内せられて拜觀に移る。正面入口にある青銅鳥居は寛文六年丙午林鐘吉日の銘文があり、防長二州刺史毛利大膳大夫大江綱廣の寄進したものである。これにつき大社側より吉川氏の説明があり、同行せられた縣囑託の曾根研三氏からこの大社と鰐淵寺との關係につき、長年の御研究の一端が開陳され、得る所が多かつた。

拜殿は先年の火災により燒失して礎石だけしかみることが出來ない。まもなく瑞垣の前に立つた我々は内に入り本殿を拜する爲、白張をつけた。これは人絹樣の白布にて作られ、參拜者はこれを附けずして瑞垣より内に入れない、潔齋を受けた一同は外より本殿を拜見する。本殿は天照大神が大國主命の爲に造立された天日隅宮をそのまゝ神殿にしたといわれるものであつて、上古の邸宅の樣式を留めている。もつとも現在のものは江戸時代の再建に係り、檜皮葺は曲線狀にそりをみせ、千木も形式的となり、其他各所に後世の手法を混入している。次いで先年修理の際取り換えた千木を瑞垣内の一隅でみて、その巨大さに驚いた。十九社、文庫と境内を廻り、本殿背後にある寶物殿へ入る。寶物の中二、三のものについて記すと、

「燧臼燧杵」臼は檜、杵は卯木、臼の緣の孔に杵を差込み磨擦して發火させる極めて原始的な發火器である。今日でも大社神供の飯を焚く際、又神酒釀造の際に使用され、乾燥している日ならば約三分程にて發火するとの事である。

文書の中、建武元年七月五日の後醍醐天皇の編旨（宿紙）を始め、他に寶治二年遷宮儀式注進狀、後醍醐天皇と謂われる綸旨二通（元弘三年三月十四日のものと同年同月十七日のもの）を始め、國宣數通がある。其他秀吉の佩刀であつたと云われる光忠の銘のある太刀一腰、慶長造營棟札等がある。

汗をかきながら文書を讀んでいる中に他の人の姿もみえなくなり、我々數人は急いで外へ出た。三時頃一應出雲大社の見學を終え、考古學にたづさわる者二、三名はこの地方より發掘された遺品をみに町の公民館に出かけ、多數のものは貸切バスにて日御碕神社に赴いた。同社は大社の北約十粁の所、日本海に面している。社殿は上下に別れ、上社に素戔嗚尊を、下社に天照大神を祀つている。現在の社殿は寛永年間造營の權現造りで、社寶として甲冑、腹卷等の外、文書多數を藏している。一部の人々は特に古文書を拜見することが出來た。附近の文島は天然記念物のうみねこの蕃殖地である。遠くからそれらしきものをみることが出來た。

第二日目（十月六日水、雨）八時宿を發して、第一班は鰐淵寺へ、第二班は萬福寺、一畑藥師へ、前者には淺子、竹田、河北の三先生と曾根研三氏が、後者には伊木先生が同行され、指導に當られた。

鰐淵寺への麓で車を降りた我々は、ぬかるみ道を雨にうたれながら上ること約廿分、仁王門を經て根本堂の前に立つた。この鰐淵寺は天臺宗に屬し、創建は賴源の正平六年十月の目安言上狀によると推古天皇の御願とされている。南北朝時代に至つて前述の賴源が同寺南院の長吏となつて、元弘年間、後醍醐天皇の隱岐遷幸に際し、忠勤に抽んで、その後、後村上天皇との二代に亙り密接な交渉の存したことが知られる。鰐淵寺と吉野朝との關係は極めて注目に價するもので、當寺にはそれを證する多くの文書を藏している。

彫刻としては壬辰年五月出雲國若倭郡臣云々の銘文のある觀音菩薩像がある。金銅製で、高さ二尺三寸程、說法印を結び、相好優美で、地方製作と認められるが、白鳳期の代表作の一つである。尙壬辰年は持統天皇六年（六九二年）に當る。外に鎌倉時代の復古佛と考えられる觀音像があつた。

次に古文書について記す。

「後醍醐天皇御願文」元弘二年八月十九日、筆力充實し、花押正しく、本文と墨色一致していることがわかり、著名なものであるが、實物を改めて拜見して、印象を深くした。

「名和長年の建武三年二月九日の軍勢催促狀」宛名は鰐淵寺南院衆徒御中とあり、文の內容は當寺の僧の中、壯者は出陣して軍忠を致し、年寄は朝敵誅伐の祈禱を爲すべしと命じている。

廿六年八月、曾根氏により發見された後村上天皇と認められる宸翰一通があつた。全文を揭げると、（行そのまゝ）

敬白、發願事、
右心中所願速令
成就者、鰐淵寺根本
藥師堂造營速終
其功、殊可專興隆之
狀如件、
正平六年九月八日　憲良

賴源の淨選上人への讓狀によれば、賴源はこの文書を賀名右（生）にて賜つたことが明記されており、憲良なる署名も、義良を後に改名しているとの鴨脚本皇代記の記述と一致する。この樣に文獻學上疑のないものであるが、たゞ全體が和樣と唐樣との混合書風であり、筆力がやゝ弱い點など、再考されるべき點があるのではないかとの說もある。文書はこの他に、建武三年正月十五日付の後醍醐天皇綸旨、興國元年八月廿三日付の後村上天皇綸旨

を始め數多くを收めた賴源の目安狀が存する。曾根氏の詳細な實地解說にて、以上のものを拜見した一行は、三時頃雨のやんだ道を下山の途についた。

「萬福寺、一畑藥師班」大寺驛に降り立つた我々は雨で泥まみれになつた道を萬福寺に向つた。萬福寺は大寺とも稱され、淨土宗に屬す。本尊は藥師如來で、兩脇侍像と共に木造で、螺髮を刻み出し、褶は飜波式をなしていて、貞觀時代の作とみとめられる。他に木造の觀音像二軀もあつたが、特に興味を喚んだものは四天王像である。或いは筆を逆手に握り、或は寶塔を腰邊に抱える樣に持するなど細部の技法の稚拙は認められるが、大極的にみた時、創意にあふれた地方作として注目さるべきものであろう。見學を終え再び大寺驛に到り、一畑口へ向つた。沿線は出雲路特有の防風林が人家をおほい、宍道湖畔の景色は誠に美しい。一畑口より暫くバスに搖られながら、有料道路を進み藥師への入口に差しかゝつた。數百段に及ぶ石段を上り、本堂前に立つた。當藥師は古くより眼病治療に効あると稱せられ、はだし參りの人々の姿もちらほらみうけられた。現存の階堂は、明治年間の建立で、山腹樹々の間に本堂、籠堂、鐘樓、藥師本堂が建ち並んでいる。本尊藥師如來は祕佛とされ、みることは出來なかつた。

三日目（十月七日木、雨）二日間の玉造に昨日別れを告げた我々は松江の宿にて目をさました。八時半宿を出て貸切バスにて市內見學に向う、修理中の松江城を外觀してから、バスは市の北部にある菅田庵を訪れた。享保年間、藩主松平不昧公の指圖によつて造られたと云うこの菅田庵は、木立に圍まれたゆるやかな坂道をしばらく上ると玄關につく。庭內は眺望よく、樹木又、豐、茶亭は周圍の狀況とよく調和している。再び車中の人となり、小泉八雲旧居を訪れた。八雲はこの地に六ヶ月過しその邸は今尙、原形のまゝ保存されて、家主根岸菖蒲夫人が案內に立つておられる。記念館は舊居の隣りにあり、八雲の原稿、用いていた机からキセルの如きものまで陳列されている。小泉記念館を出た一行は、市の中心部を經て、東南に進む、大庭鷄塚をバスの中より眺めて神魂（カモス）神社（大庭大宮）に參詣した。雨は相變らず降つている。當神社は伊弉冊尊を主祭神として祀り、本殿は從來、應安元年（一三六八年）の建立とされていたが、昭和廿三年の修理の際、柱に正平元年（一三四五年）丙戌十一月　日と墨書されているのを發見した。これによると更に廿年程遡り得ることになる。いずれにせよ、現存の出雲大社本殿の延享年間建立より約四百年程古いものとなる。神魂神社から國分寺址を經て、馬潟よりモーター船に乘り美保關に向う。かなり風を增した悪天候にも拘らず、我々を乘せた船は中ノ海を東北に進む。大正十三年建造の四四屯のこの

船はかなり小刻にゆれる。青函連絡船洞爺丸の事故のあとのことゝて一行はやゝ不安のうちに、四時半頃、美保關へ着いた。美保神社は棧橋より約二町の所に位置する。社殿は二殿連棟の所謂美保造りであり、祭神は向つて右に事代主神、左に三穗津姫神を祀る。エビス神としての民間信仰は殆んど全國的に廣まり、海神、商業神として崇められていると云う。中島宮司の御好意で一同は廣間に導かれ、當神社獨特の神事である、青柴籬神事を中心としてまとめられている天然色の幻燈をみせて頂いた。この青柴籬神事は四月八日の例祭に行れるもので、事代主神が國土讓渡の後、八重の青柴籬を造り、御船枻を踏んで神さりました故事に因むものである。又、十二月三日に諸手船の神事がある。共に繪卷となつている。かくて民謠で知られた關の五本松を西方の山上に眺め、三日間に亙る見學を滯りなく終え、夕やみ迫る頃解散した。

この旅行に當り、種々御世話をおかけした恒松知事を始め、祕書課の川崎、加藤兩氏、曾根研三氏、千家尊宣氏、其他多くの方々、指導の任に當られた伊木先生始め、淺子、竹田、河北の先生方に厚く御禮申し上げる次第である。　（高橋正彦記）

十月三日から行われた山陰地方の旅行の解散後三保關に一泊して翌十月八日、伊木先生外三人で待望の隱岐島へ行くことにした。境から船に乘るのであるが、そこであと三人が一緒になり一行は七人となつた。この連絡船は一日一度しか出ない。第二隱岐丸と云う約五〇〇噸の船である。惡天候の場合缺航するのだそうで當日は晴天に恵まれなかつたが、ともかく九時に出航した。船は相當に搖れたが甲板に出てみると沖へ出るにつれ海の色の變つていくのがはつきりみえた。本州が霞んで來る頃に隱岐島は次第にはつきりして來る。約四時間程で第一の寄港地島前の浦郷に着き、それから又四時間近く乘つて目的地島後の西郷に着く。船が入ると大勢の人が出ている。正面の高臺に氣象臺がみえる。一旦旅館に落ちついた後、町に出てみると西郷は思つたよりは繁華で、テープレコーダー等が店頭にあるのが目につく。たゞ電氣はここではよほど貴重らしい。山陰地方もそうだつたが、海水は非常に澄んで美しい。旅館は海に面しているので、その前に出ると蛸や縞鯛が泳いでいるのがみえた。翌日は早速縞鯛を釣つて燒いて貰つた。夜は灯をつけた舟が灣のあちこちにみえ、遠くに燈臺の光がみえる。

翌日はこの島の名所玉若酢神社、國分寺、等をまわることにした。バスはあることはあるのだが非常に不便なので困つていたが、幸い島根縣廳から連絡がとれていたので支廳から車をまわして戴き、一番遠い水若酢神社まで行くことが出來た。先ず西郷から約二粁の所にある磯村の玉若酢神社にまいる。境内には樹齡二千年と云う大きな八百杉がある。隱岐の總社でこの邊が昔の國府のあつた所であるが、近くで働いている人達にきいても、そんな

ことには無關心であつた。

國分寺は玉若酢神社の東北程近い所にある。明治二年排佛毀釋の時燒失し、今は礎石と新しい堂宇とを存するだけであるが、こゝで四天王など古佛像や江戸時代の文書一、二通を見た。なお當寺は後醍醐天皇行在所の趾ということで、公爵近衞文麿の字で碑が立つている。行在所であつた唯一の證據は鰐淵寺にある古文書なのだそうである。

國分寺から自動車で三十五分、川に沿つたり山に沿つたり、トンネルを抜けたりして行くと隱岐一の宮である五箇村水若酢神社に着く。途中山沿いの所はひどく道が悪く、しかも國分寺に居た時から雨が降り出していた。兩側に廣がる畑をみていると、隱岐の島もかなり廣く感じられた。河原にいる黑い牛も物珍らしく思われる。忌部宮司の話によると水若酢神社はもとは近くの今、宮原と呼ばれている所にあつたのが江戸の中期に水難にあつてここに移つたもので、その折に古文書等も喪失したのだそうである。そこは三つの河の合流點に當つている。現在の境内は松の木が多く、社殿の横に古墳がある。

歸りに先刻寄つて留守だつた玉若酢神社の祠官億岐家（舊國造家）に行き一番樂しみにしていたと云つてもよい驛鈴、隱岐屯倉印や傳符を見せてもらつた。驛鈴は大化の改新に基いた驛傳の制に依つて官人が驛路の人馬徵發の證として造られたものであると云う。二つの驛鈴は上にむけてふるとそれ〴〵異つた何とも云えない美しい澄んだ音を出すのである。倉印も鑄印の制によつて造られたものだそうである。殊に從來ほとんど問題視せられなかつた傳符について伊木先生から、その彫刻の文字を始めよく見ておくようにと注意せられた。歸りには雨が上がつていた。旅館に着くまで支廳の方に隱岐の言葉等について、いろ〳〵伺つたが、ここでは本土のことを地方（じかた）と云うのである。島々の間の船の連絡は非常に悪く、と云うのは本州との連絡船二艘以外に船がなく、しかもそれは朝六時に出るので、更にもう一日滯在を延ばして合計三泊することにして翌朝早く島前に向かつた。隱岐は大きな島が四つあるが、大體が二つに分かれ、本土より遠い一番大きい島を島後（どうご）と云い、本土に近い西島、中ノ島、知夫里島の三島を島前（どうぜん）と云う、西郷港のあるのは島後である。相當あれ氣味の海を約二時間半汽船隱岐丸に乘つて海士村中里の後鳥羽上皇の御遺跡に近い菱浦につく。途中船の中で名產黑牛の積荷狀況をみることが出來た。菱浦は島後よりはずつと邊鄙な交通不便な所で、こゝから中里へは内海沿いの道を一里近く歩いて行くのである。それだけに靜かな美しさが感じられる。まず當時の豪族であり上皇に由緣のある村上家を訪ね、上皇關係の遺物等を見せてもらつた。當家は代々、助九郎の名が傳わつて居り、昔、上皇がしば〳〵訪れられた所である。近親の松浦さんと云う方に案内されて、行在所跡

（源福寺跡）へ行つたが、欝葱とした木立の中にあり落葉で礎石も見失われがちであつた。その後、隱岐神社にお詣りし、城山を踏査し、菱浦に歸り、一時すぎ汽船にて對岸別府村の黑木御所に行く。ここも後醍醐天皇行在所跡と傳えられる地であるから、國分寺以來是非行きたいと思つていた所である。小高い丘の上にあり、黑木神社は小さな神社で、黑木御所趾の碑が立つている。別府についたのが一時半頃であつたが、その日の宿泊地浦郷へ行くバスが二時（しかもこれが終發なのである）に出るのでゆつくりしてはいられなかつた。隱岐の交通の便はすべてこの調子である。後できいたことであるが、このバスは戰時中の病院車を改裝したものだそうである。それにしてもひどいものを病院車にしていたものだと思わざるを得ない。島は大體半農半漁と聞いたが、道は畑と海に沿つてずつと續いている。浦郷に着いて早速旅館を探したが、西郷に比べればやゝと云うより相當に邊鄙な所なので旅館も三、四軒しかないのである。しかも翌晩祝言があるとか、法事があるとか、主人が留守だとか、狹いからとか云つて斷られたが、とにかく一泊して、翌十一日朝、第二隱岐丸に乘つて本土に向つた。快晴で海上は全く靜かで船もゆれず午後一時半頃久しぶりに地方の土を踏んだのである。

（今無畏子記）

第二回早慶連合史學講演會

昭和二十九年十一月二十日　於三田演說館

講演者

エヂプトとスーダン　早大教授　定金右源二氏

古代船の發見　本塾教授　松本信廣氏

（共に幻燈使用）

會終了後、第三會議室に於て懇親會が催され、兩校の教授以下多數が出席して盛會裡に歡を盡して午後八時散會した。

三田史學會例會報告

第四三〇回例會

昭和三十年一月二十八・二十九日兩日午後一時より　於演說館

國史學科

親鸞上人　平尾　雅之

吾妻鏡と北條氏の他氏族排斥について　高橋　正彥

建長寺開創の意義　石井　要一

吉田神道についての一考察　中山　善衛

中世封建制における農民負擔に關する歷史的考察　加藤　堯士